

■ 概況

7/11~7/17のNYMEX・WTIは、56.78~60.21ドルの範囲で推移した。

7月18日は、株式市場の軟調、ドル高進行による原油先物の割高感、さらに、前日のEIA在庫週報でドライブシーズン入りに係わらずガソリンが大きく積み増されたこと、メキシコ湾の暴風雨で止まっていた生産が再開しつつあること等から、4日続落した。8月限終値は前日比1.48ドル安の55.30ドル。

週末19日は、米国海軍艦艇がホルムズ海峡でイラン無人機を撃墜したこと、イラン革命防衛隊がホルムズ海峡で英国タンカーを拿捕したことから、5日ぶりに反発した。8月限終値は前日比0.33ドル高の55.63ドル。また、ペカーヒューズ社の米国稼働石油掘削装置数は779基で前週比5基減3週連続の減少。

週明け22日は、先週末以来のイランをめぐる緊張の高まりに加え、イランが米国CIAのスパイとして15名を逮捕したとの報道もあり、続伸した。ただ、リビアで19日から生産を停止していたシャララ油田が全面的に生産を再開したとの報道が上値を抑えた。この日納会を迎えた8月限終値は前週末比0.59ドル高の56.22ドル。

23日は、米国がイラン原油を輸入したとして中国の政府系石油会社を制裁対象にするなど、イランをめぐる状況の緊張が意識されるとともに、翌日に予定される米国原油在庫週報で6週連続の取り崩しが予想されることから、3営業日連続で上伸した。この日から中心限月に繰り上がった9月限最終値

は前日比0.55ドル高の56.77ドル。

17日は、米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報で、原油が前週比1080万バレル減と市場予想(400万バレル減)を上回る6週連続の取り崩しであったものの、ガソリン在庫の減少幅が市場見通しを下回る水準であったこと、メキシコ湾の生産施設の操業の回復を始めたことから、4営業日ぶりに反落した。9月限の終値は前日比0.89ドル安の55.88ドル。

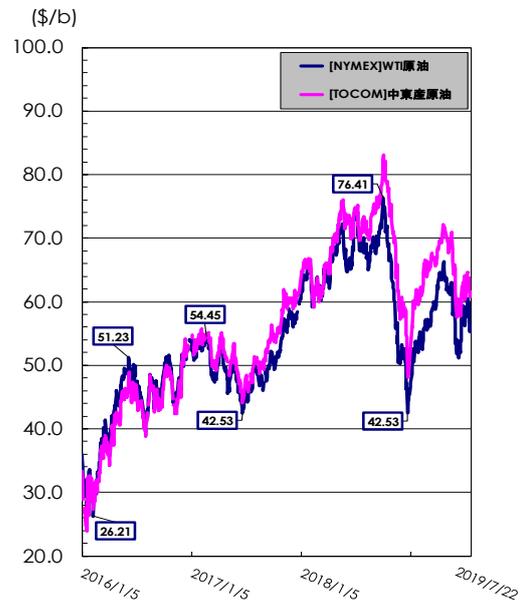
アジアの指標原油である中東産パイ原油/東京市場(9月渡し)は7月11日~17日の間63.00~65.70ドルの範囲で推移した。7月18日62.30ドル、19日61.50ドル、22日62.20ドル、23日62.40ドル、24日62.80ドルで推移した。

為替は7月11日~17日の間107.97~108.54円の範囲で推移した。7月18日107.84円、19日107.55円、22日107.98円、23日108.05円、24日108.21で推移した。

そのような中で、7月22日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.2円の値上がり、軽油も同0.2円の値上がり、灯油は同1円の値上がり(18%ベース)だった。ガソリン・軽油・灯油ともに、2週ぶりの値上がりだった。

この週(7月第4週)の原油コストは値下がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに、全社1.5円の値下げとなった。

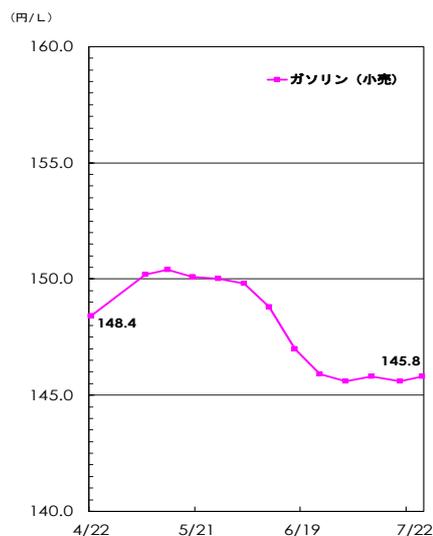
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	7/14 ~ 7/20	3,373 ▲63	▼-
	トッパー稼働率 (%)	"	86.1 ▲1.6	▼-
	原油在庫量 (千kl)	7/20	12,897 ▼713	▼-
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	7/22	61.46 ▼2.35	▼9.2
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	7/22	56.22 ▼3.36	▼11.7
	原油CIF単価 (\$/bbl)	6月下旬	72.71 ▼0.40	▼3.71
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	49,564 ▼482	▼3,219
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	108.36 ▲0.47	▲1.45
	外国為替TTSレート (¥/\$)	7/22	108.98 ▼0.01	▲2.98



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/14 ~ 7/20	881 ▼ -31	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	885 ▲ 13	▼ -	
	輸出	"	25 ▲ 25	▼ -	
	在庫	7/20	1,501 ▼ -29	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/16 ~ 7/22	59.8 ▲ 0.8	▼ -7.0	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/16 ~ 7/22	55.7 ▼ -2.2	▼ -7.9
		(TOCOM/中部)	7/22	56.7 ▼ -2.3	▼ -6.3
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/22	145.8 ▲ 0.2	▼ -6.5	

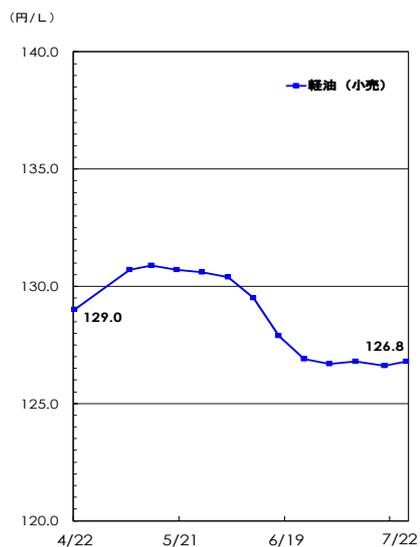
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

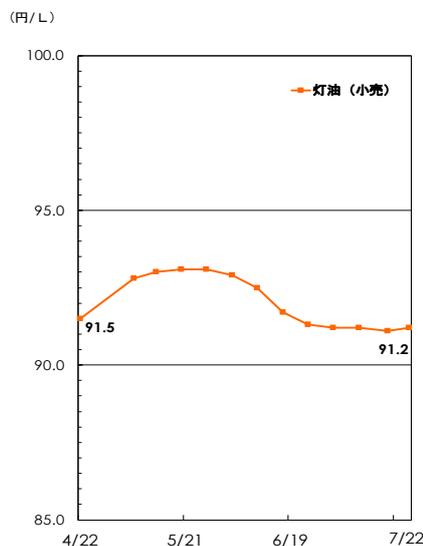
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/14 ~ 7/20	916 ▲ 130	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	588 ▼ -47	▲ -	
	輸出	"	188 ▲ 120	▼ -	
	在庫	7/20	1,484 ▲ 140	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/16 ~ 7/22	62.6 ▲ 1.0	▼ -6.6	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/16 ~ 7/22	63.2 ▲ 0.8	▼ -7.0
		(TOCOM/中部)	7/22	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/22	126.8 ▲ 0.2	▼ -4.0	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/14 ~ 7/20	153 ▲ 8	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	104 ▲ 36	▲ -	
	輸出	"	0 ▼ -19	▼ -	
	在庫	7/20	1,635 ▲ 50	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/16 ~ 7/22	61.5 ▲ 0.5	▼ -6.8	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/16 ~ 7/22	58.2 ▼ -0.6	▼ -8.3
		(TOCOM/中部)	7/22	59.3 ▼ -1.2	▼ -9.7
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/22	91.2 ▲ 0.1	▼ -1.7	



■ 関連情報

1 海外/原油

7月24日のNYMEX市場WTI原油は、米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報で、原油が前週比1080万バレル減と市場予想(400万バレル減)を大きく上回る6週連続の取り崩しで、買いが先行したものの、ドライブシーズン入りしたガソリンの減少幅が市場見通しを大きく下回る水準であったこと、ハリケーン「バリー」の接近で停止していたメキシコ湾の生産施設の操業が戻り始めたこと、高値圏での利食い売りも広がったことから、売られ、4営業日ぶりに反落した。9月限の終値は前日比0.89ドル安の55.88ドル、10月限の終値は前日比0.85ドル安の56.00ドル。

EIAによると、7月22日時点のガソリンの小売価格は、前週比2.9セント値下がりの1ガロン2.750ドル(79.1円/ℓ)、ディーゼルは同0.7セント値下がりの3.044ドル(87.5円/ℓ)となった。ガソリンは4週ぶりの値下がり、ディーゼルは2週連続の値下がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2019年7月14日～7月20日に休止したトッパー能力は18.4万バレル/日で、前週に対して14.8万バレル/日減少した(全処理能力は351.9万バレル/日)。原油処理量は337.3万klと、前週に比べ6.3万kl増加。前年に対しては8.5万klの減少。トッパー稼働率は86.1%と前週に対して1.6ポイントの増加、前年に対しては2.2ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてガソリン、ジェット、A重油が減産となり、その他の油種で増産となった。ガソリン/3.4%減、ジェット/18.1%減、灯油/5.3%増、軽油/16.5%増、A重油/13.8%減、C重油/3.3%増。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.0万kl減)。軽油の輸出は18.8万kl(前週比12.0万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は、前週比ではジェット、軽油が減少となり、その他の油種で増加となった。前年比ではガソリン、ジェット、C重油が減少となり、その他の油種で増加となった。ガソリンの出荷は88.5万 kl(対前週1.5%増)と2週振り増加となり、29週連続で100万klを下回った。ジェット8.4万kl(対前週34.4%減)、灯油10.4万kl(対前週52.6%増)、軽油58.8万kl(対前週7.4%減)、A重油18.3万kl(対前週

2.9%増)、C重油17.1万kl(対前週12.4%増)。

(単位:千KL)

	今週 (7/14 ~ 7/20)	前週 (7/7 ~ 7/13)	前週比	
ガソリン	885	872	▲ 13	(1%)
ジェット燃料	84	127	▼ -43	(-34%)
灯油	104	68	▲ 36	(53%)
軽油	588	635	▼ -47	(-7%)
A重油	183	178	▲ 5	(3%)
C重油	171	152	▲ 19	(13%)
合計	2,015	2,032	▼ -17	(-1%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

7月20日時点の在庫は、ジェット、灯油、軽油で積み増しとなった。前年に対しては、灯油、軽油、C重油で積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。

ガソリンは150.1万kl、前週差2.9万kl減。前年に対しては3.2万kl少ない。

灯油は163.5万kl、前週差5.0万kl増。前年に対しては1.4万kl多い。

軽油は148.4万kl、前週差14.0万kl増。前年に対しては3.8万kl多い。

A重油は70.1万kl、前週差0.9万kl減。前年に対しては4.1万kl少ない。

C重油は196.1万kl、前週差2.5万kl減。前年に対しては0.4万kl多い。

(単位:千KL)

	今週 (7/20)	前週 (7/13)	前週比	
ガソリン	1,501	1,530	▼ -29	(-2%)
ジェット燃料	931	916	▲ 15	(2%)
灯油	1,635	1,585	▲ 50	(3%)
軽油	1,484	1,344	▲ 140	(10%)
A重油	701	710	▼ -9	(-1%)
C重油	1,961	1,986	▼ -25	(-1%)
合計	8,213	8,071	▲ 142	(1.8%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

7月16日～22日の原油価格は、前週比で値下がりし、為替レートも円高で、原油コストは値下がりしたものと見られる。

陸上スポット価格は、7月16日～22日の間、ガソリン113～114円台で値上がり後値下がり、軽油61～63円台で値上がり後やや値下がり、灯油60～62円台で値上がり後大きく値下がりして推移した。

海上スポット価格は、同期間で、ガソリン115～116円台で値上がり後値を戻し、軽油63～64円台で値上がり後ほぼ

横ばい、灯油55～56円台で出入り後やや値下がりして推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン108～111円台で大きく値下がり、軽油62～63円台で大きく値上がり、灯油57～59円台で大きく値下がり後回復して推移した。

次週の元売の卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社1.5円の引き下げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

7月16日～22日の製品スポット市況は、7月9日～15日平均と比べ、ガソリン先物、灯油の海上と先物を除き、他の油種・取引で値上がりした。

直近の陸上スポット価格(7/16～7/22千葉、川崎、中京、阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、前週比で、ガソリンは0.8円の値上がり、灯油は0.5円の値上がり、軽油は1.0円の値上がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、前週比で、ガソリンは1.1円の値上がり、灯油は0.9円の値下がり、軽油は0.9円の値上がりだった。

先物価格は、前週比で、ガソリンが2.2円の値下がり、灯油は0.6円の値下がり、軽油は0.8円の値上がりだった。

7月第5週の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社1.5円の値下げだった。なお、元売会社は、2010年から卸価格の改定に際して、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断する方式としたが、2014年6月から、原油調達コストをより重視する方式に変更した。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー4地区平均]	今週 (7/16～7/22)	前週 (7/9～7/15)	前週比
レギュラー	59.8	59.0	▲ 0.8
灯油	61.5	61.0	▲ 0.5
軽油	62.6	61.6	▲ 1.0

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値] [平均]	今週 (7/16～7/22)	前週 (7/9～7/15)	前週比
レギュラー	55.7	57.9	▼ -2.2
灯油	58.2	58.8	▼ -0.6
軽油	63.2	62.4	▲ 0.8

※上記価格は税抜き価格

参考値 (7/16～7/22実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 0.8	▼ -2.2	▼ -0.7
灯油	▲ 0.5	▼ -0.6	→ 0.0
軽油	▲ 1.0	▲ 0.8	▲ 0.9
A重油	▲ 0.6		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

7月22日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.2円高の145.8円、軽油も同0.2円高の126.8円、灯油は18%ベースで同1円高の164.1円(1%ベースでは同0.1円高の91.2円)だった。ガソリン・軽油・灯油ともに2週ぶりの値上がりだった。都道府県別には、値上がり率が25都県、横ばいが6府県、値下がり率が16道府県だった。全国最安値は宮城県の139.7円(前週比0.6円高)、その次は埼玉県の139.9円(同0.2円高)、最高値は長崎県の157.5円(同0.1円高)であった。最も値上がりしたのは1.5円高の神奈川県(143.3円)、最も値下がりしたのは0.9円安の岡山県(144.7円)だった。

先週の原油コストは値上がりし、今週適用の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社2.0円の値上げとなった。

今週は、原油価格は値下がりし、為替レートも円高で、原油コストは値下がりし、次週適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに全社1.5円の引き下げとなった。次週(7月29日)のガソリン・灯油の小売価格は小幅な値下がり予想される。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (7/22)	前週 (7/16)	前週比	直近高値
レギュラー	145.8	145.6	▲ 0.2	08/8/4 185.1
灯油	91.2	91.1	▲ 0.1	08/8/11 132.1
軽油	126.8	126.6	▲ 0.2	08/8/4 167.4

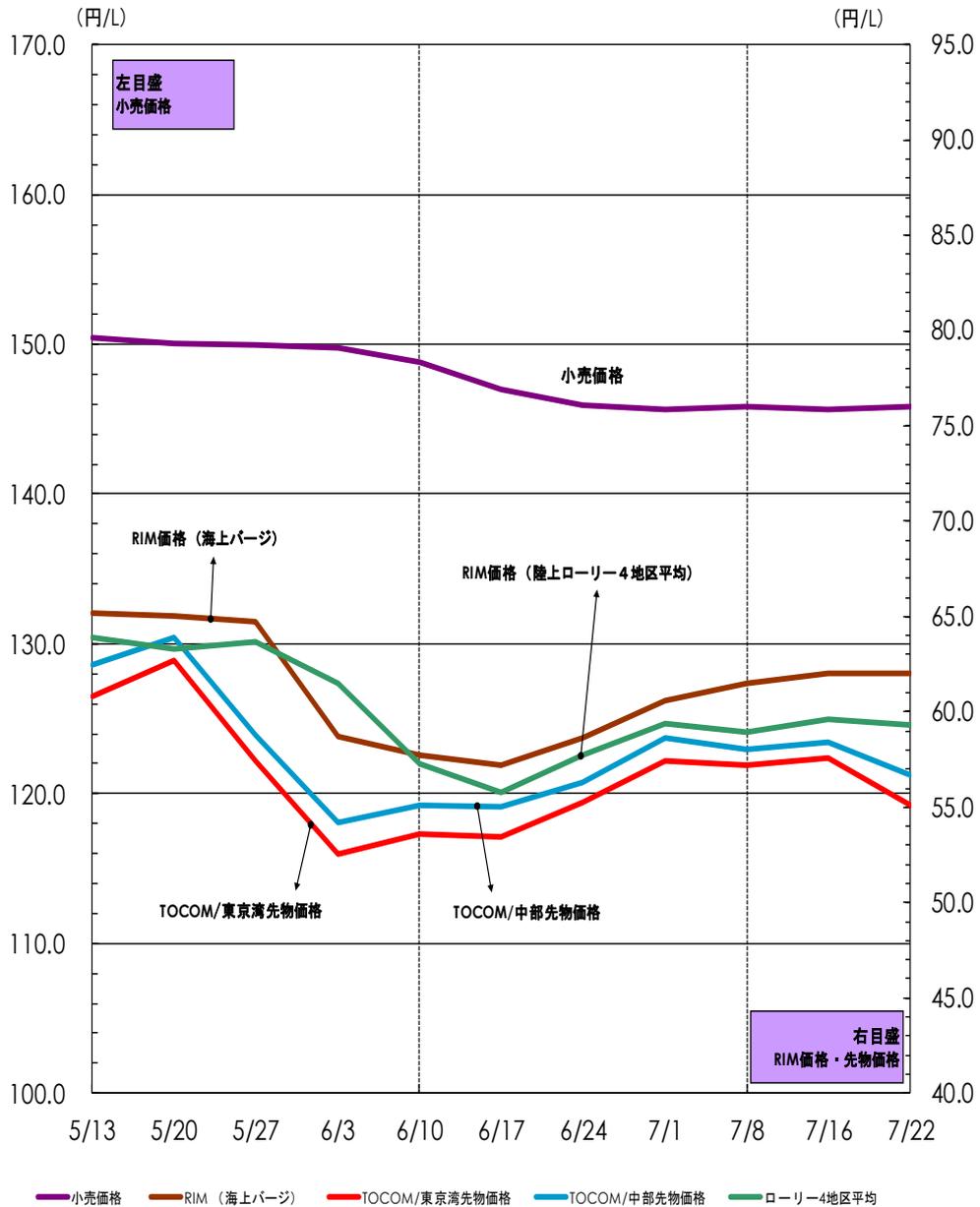
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2019/5/13 ~ 2019/7/22)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2019第17号)の公表は、8/2(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(平成30年9月末現在)は、12月19日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾 及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。